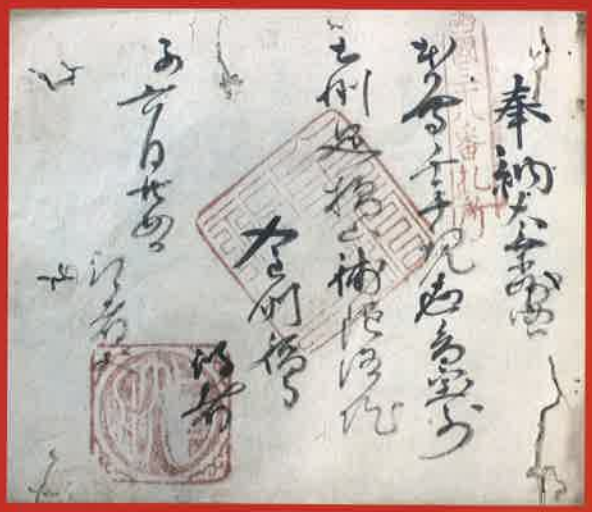
取手市制施行40周年記念・埋蔵文化財センター第29回企画展



明和5年　山崎庄兵衛西国巡礼・四国遍路納経帳（山崎英太郎家文書）

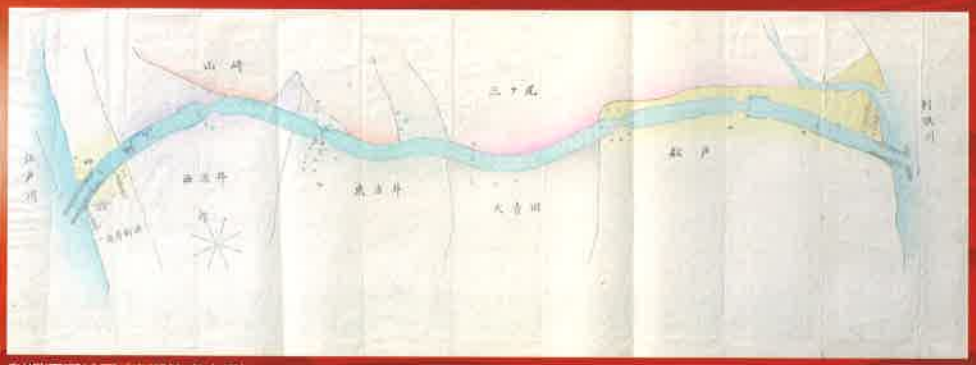
明治17年3月　七駒絵馬（東漸寺所蔵）

「街道・水運・鉄路の旅」

平成23年2月21日（月）から4月22日（金）まで
午前10時から午後4時30分まで（入館は4時まで）

会期中無休／入館無料

明治45年5月　東部鉄道旅行案内（個人蔵）



利根運河絵図（広瀬篤家文書）

取手市埋蔵文化財センター
〒302－0007　取手市吉田383　TEL0297－73－2010　FAX0297－73－5003
maibun@city.toride.ibaraki.jp

開催にあたって

江戸時代の取手は水戸街道の宿場であり、また利根川水運の要となる河岸がありました。すなわち取手は、街道と水運という、江戸時代の主要な交通路の交わる場所であったのです。さらに明治以降は、利根川には蒸気外輪船が運航し、利根川と江戸川を短絡する利根運河が開削され、水運は一層の発展を見ました。一方常磐線の前身である日本鉄道や、常総線の前身である常総鉄道が開業し、交通の重要地点としての取手の地位は、一層高まりました。

このような背景の下、取手の人びとは街道・水運・鉄道を利用して、旅に出ました。その範囲は遠く関西方面、さらには四国にまで及んでいます。それと同時にさまざまな人びとが取手を訪れ、この地に足跡を残しています。

今回の企画展は、市制施行40周年記念企画展の第2弾として、取手の歴史と深いかかわりを持つ街道・水運・鉄道を、「旅」に焦点をあてて取り上げ、取手にかかわる人びとのさまざまな旅の姿を紹介します。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたりご協力をたまわりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成23年2月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「内務卿山田顕義・ムルデルの利根川視察に随行する　－明治前期の利根川蒸気船交通－　」
講師：村越博茂氏（印西市史編さん委員）
日時：3月19日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

公開講座（取手市郷土史研究会と共催）

「桜田門外の変と取手　－幕末の水戸街道－」
講師：埋蔵文化財センター職員
日時：3月5日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

歴史講座

「常磐線・常総線の歴史と取手」
講師：埋蔵文化財センター職員
日時：4月2日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

講演会・各講座とも会場は、井野公民館（井野2－17－17）会議室、定員90人（当日受付順）
駐車場が少ないので、公共交通機関をご利用ください
（取手駅東口から関東鉄道バス井野団地循環で井野公民館前下車すぐ）

展示説明

3月6・20・21日、4月3・16・17日：午前11時と午後2時から
3月5・19日、4月2日：午前11時から　予約不要

市指定文化財東漸寺観音堂の内部特別公開（本郷3－9－19）

4月8日（金）から10日（日）まで　午前10時から午後4時まで

例　言

1. このパンフレットは、平成23年2月21日から4月22日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第29回企画展「街道・水運・鉄路の旅」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。パンフレットの執筆にあたり、多くの先行研究を参考としましたが、出典の注記は略し巻末に主な参考文献をあげてあります。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

相浦秀也、足立清、海老原千義、海老原恒久、柿沼利治、小池康久、佐賀純一、佐賀靖子、城之内景子、染野修、田中亮、遠山仁惠、根本彰、野口幸子、人見寧則、広瀬篤、広瀬実、村越博茂、矢口浩、山崎英太郎、山中金三、吉岡重弘、足立区立郷土博物館、茨城県立歴史館、印西市教育委員会、関東鉄道株式会社、木下まち育て塾、宮内庁書陵部、信楽寺、長禅寺、東漸寺、利根川舟運地域づくり協議会、流山市立博物館、東日本旅客鉄道株式会社取手駅、成田山霊光館、龍禅寺

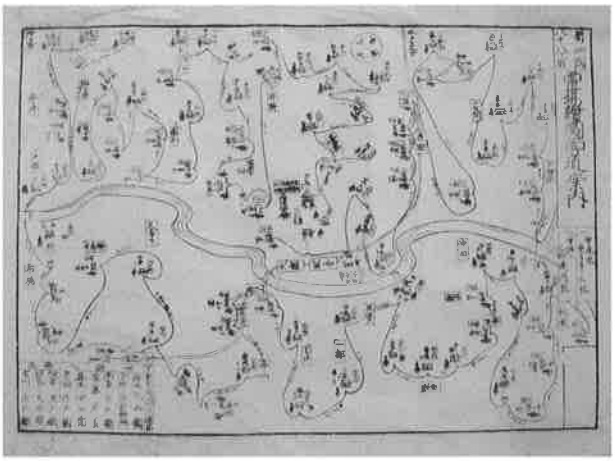
1．観覚光音禅師の新四国相馬霊場開基

大鹿村の農民で穀物商を営んでいた伊勢屋源六は、宝暦10年（1760）に出家し観覚光音禅師と号し、四国八十八か所霊場を遍路しました。そして各札所の砂を持ち帰り、これを近在の寺院・仏堂や神社などに埋めて札所とし、新四国相馬霊場八十八か所を開基しました。新四国相馬霊場は、番外89番札所、観覚光音禅師が晩年を過ごし死去した場所に建立された光音堂、遍路の途中に立ち寄り参拝する掛所4か所の総計94か所から構成されています。札所は現在の取手市域に59か所、千葉県我孫子市に27か所、同柏市に4か所あります。これは旧下総国相馬郡が、利根川をはさんで南北両側にあったからです。

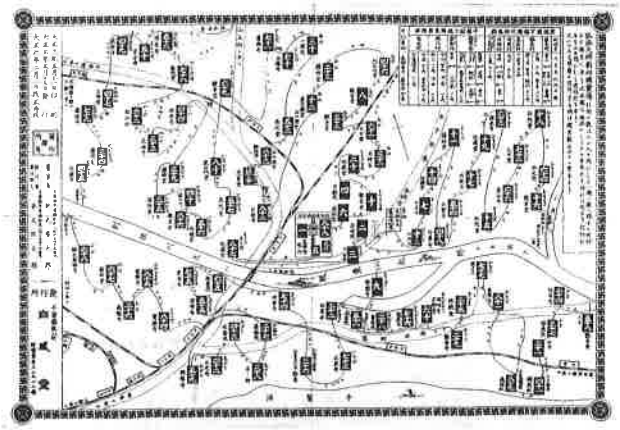
観覚光音禅師は、信濃国佐久郡海尻村（現長野県南牧村）の出身で名を源六と言い、13歳の時に江戸に出て呉服商伊勢屋庄左衛門の下で働き、30歳の時に伊勢屋と取引があった渡辺家の借財返済に尽力しました。この時に渡辺家から得た謝礼金を元手に独立し、取手宿で商売を始めました。店は繁盛しましたが、元来信仰心が厚かったので長禅寺の幻堂禅師の法弟となり、観覚光音禅師となったのです。

さて四国八十八か所遍路とは、四国の4か国（阿波・土佐・伊予・讃岐）にある真言宗の開祖弘法大師空海ゆかりの寺院88か所を巡るものです。室町時代中ごろに起源があるとされ、本来はきびしい修業の場でしたが、江戸時代に入ると大衆化し、さらには娯楽的要素も含まれてきました。しかし遠く四国の地まで出かけることは、やはり多くの庶民には困難でした。そこで、四国を遍路したのと同じご利益・ご功徳が得られる地方版の四国八十八か所が、各地に開基されました。新四国相馬霊場はその一例であり、「取手の春はお遍路さんの鈴の音にのってやってくる」と言われるように、今なお多くの人びとの信仰を集め、取手の春の風物詩となっています。

天保15年9月　新四国八十八か所取立の義お尋ねにつき申上げ（根本彰家文書）
大鹿村の村役人が、関東取締出役の質問に対して提出した返答書です。



安永9年初版、安政2年再版　新四国八十八ケ所霊場絵図面道案内
（取手市教育委員会所蔵）



大正3年5月初版、大正6年2月再版
相馬霊場八十八ケ所手引図面（取手市教育委員会所蔵）

長禅寺境内の第5番札所
長禅寺には、この他に1番・88番札所や観覚光音禅師をまつる光音堂があります。

新四国相馬霊場八十八か所納経帳（個人蔵）
右は第70番札所永福寺、左は第71番札所東漸寺です。

光音堂（白山6丁目）
観覚光音禅師が晩年を過ごし、没した場所に建てられました。

2．山崎庄兵衛の西国巡礼と四国遍路

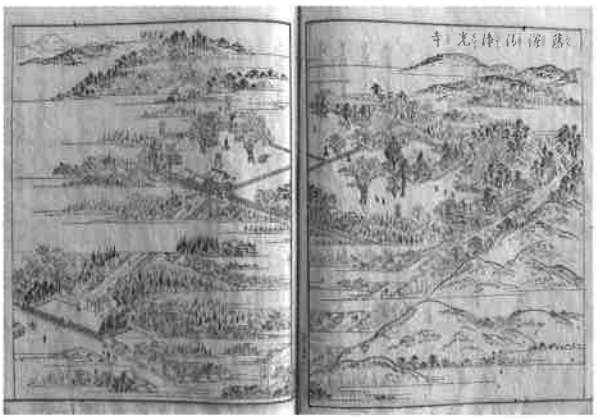
明和5年（1768）の4月から7月にかけて、稲村の山崎庄兵衛は、西国三十三か所観音巡礼・四国八十八か所遍路の旅に出ています。西国巡礼とは、現在の京都・大阪府、和歌山・奈良・滋賀・兵庫・岐阜県の2府5県にある観音菩薩をご本尊とする寺院33か所を、巡るものです。「法華経」に、観音菩薩が人びとをお救いになる時に、33のお姿に変化すると説かれていることに由来する信仰です。

さて山崎庄兵衛の巡礼・遍路の行程は、納経帳に記された寺社名と日付から知ることができます（写真は表紙）。納経帳とは、寺院に参詣し写経を奉納した際に、その受領印（宝印）を押していただく帳簿を言います。

納経帳によれば、稲村出立の日はわかりませんが、4月8日には江戸の寛永寺と浅草寺に参詣し、東海道を西に上り、10日には時宗の総本山である藤沢の清浄光寺（遊行寺）に、12日には三島大社に参詣し、次いで23日には伊勢神宮（内宮）と朝熊岳に参詣しました。そして江戸を出てから23日目の4月晦日、西国1番札所の那智札所実方院に詣で、以後西国巡礼に入ります。5月23日に23番札所の摂津国中山寺に参詣すると四国に渡り、ここからは四国遍路となります。四国遍路は78番札所の讃岐国郷照寺から始まり、88番の大窪寺までは順に廻り、次に10番の切幡寺からは逆の順番で1番の霊山寺に向かいました。17番妙照寺、16番観音寺を参詣した後は、11番藤井寺からはほぼ順番通りに札所を廻っています。7月13日、77番札所の讃岐国道隆寺で四国遍路は満願成就となり、7月16日の播磨国円教寺（西国27番）から再び西国巡礼に戻ります。27日には西国33番の美濃国華厳寺に参詣し、西国巡礼も満願成就を迎えます。江戸を出てから112日目でした。以後取手に戻るまでの足取りは不明です。

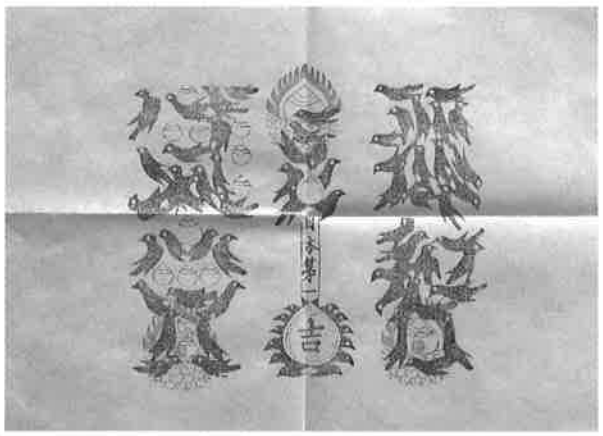
当時これだけの巡礼・遍路の旅に出ることは、なかなかできることではありませんでした。山崎家は稲村で村役人を務める家でしたので、信仰心に加えてある程度の経済力があったので可能だったと言えます。

明和5年　山崎庄兵衛西国巡礼・四国遍路行程略図



時宗総本山清浄光寺（「東海道名所図会」海老原恒久家文書）
山崎庄兵衛は、4月10日に参詣しています。

伊勢神宮（内宮）絵はがき（取手市教育委員会所蔵）
山崎庄兵衛は、4月23日に参詣しています。



熊野那智大社の牛王宝印（個人蔵）
厄除けの護符ですが、熊野三山（本宮大社・新宮大社・那智大社）のものは、烏点（うてん）と呼ばれるからすを象った絵文字で神社名が書かれています。三社の牛王宝印をすべて展示します。

四国八十八か所札所本尊御影（個人蔵）
左から1番霊山寺、44番大宝寺、88番大窪寺です。88か所の御影をすべて展示します。

3．水戸街道を行きかう人びと

寛文9年（1669）2月、宮和田村の信楽寺（しんぎょうじ）では絹本金箔地刺繍釈迦涅槃図（けんぽんきんぱくじししゅうしゃかねはんず）が完成しました（写真は4頁）。涅槃図の裏書からは、寛文年間に京都から来た縫箔師が、近隣の村むらから浄財を集め、3年の歳月をかけて制作したことがわかります。制作地は、京都と考えられます。すなわちこの涅槃図は、京都からはるばる取手まで運ばれてきたことになります。

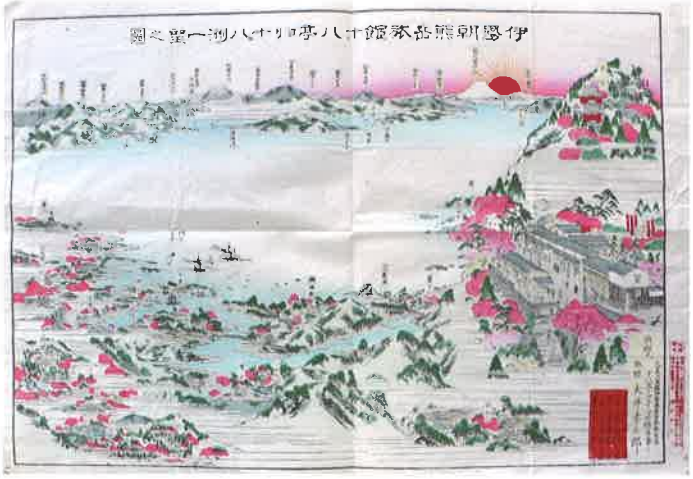
ところでこの頃の水戸街道は、我孫子からは東に向かい布佐で利根川を渡り、布川（現利根町）から北上していました。最初に取手を通った水戸藩主は2代目の徳川光圀で、それは延宝6年（1678）とも天和2年（1682）とも言われています。宮和田村をはじめ現在も相馬二万石と称される小貝川流域の村むらは、江戸時代に入ってから新たに新田開発され成立しています。開発が一段落し、人びとにはこのような涅槃図の制作にあたり、浄財を寄進できる生活のゆとりができたことがうかがえます。

時代は下り幕末になると、政局の変動に伴い、水戸街道を行きかう人びとにも緊迫の度合いが深まります。水戸藩第9代藩主徳川斉昭の側近として藩政改革に活躍した藤田東湖は、回天詩史で「二十五回刀水（利根川）を渡る」と詠んでいて、江戸と水戸の間をしばしば往復し、いくども利根川を渡ったことがわかります。徳川斉昭やその子で江戸幕府最後の15代将軍となった徳川慶喜も、江戸・水戸間の往復に、何度か取手や藤代の本陣を利用しています。

平成22年（2010）に公開された映画「桜田門外ノ変」や、吉村昭氏の原作には、水戸藩士関鉄之介が蝦夷地（北海道）への渡航を依頼する人物として水原寅蔵（すいばら）が出てきます。水原は近江国の生まれで、越後国水原村（現新潟県阿賀野市）を拠点に活躍しました。後に蝦夷地に渡り、箱館五稜郭の建設に従事、箱館戦争では新政府軍と戦いました。戦後は新政府の黒田清隆の知遇を得て、北海道開発に尽力しました。水原のご子孫が市内に住んでおり、黒田から水原に贈られた書を守り伝えてきました（写真は4頁）。水戸街道と小説・映画「桜田門外ノ変」の取り持つ奇しき縁と言えます。

相馬霊場八十八ケ所手引図面（取手市教育委員会所蔵）

安藤広重画「東海道五十三次」の内「三島」（個人蔵）
縦10.2cm×横16.7cmの小判ですが、版木から刷ったものです。
昔のお茶漬けのおまけではありません。55枚すべてを展示します。



明治28年3月　伊勢朝熊岳旅館十八亭ヨリ十八州一望之図（故野口多蔵家文書）
山崎庄兵衛は、明和5年4月23日、伊勢神宮参詣の後に朝熊岳に登り、金剛証寺に参詣しています。

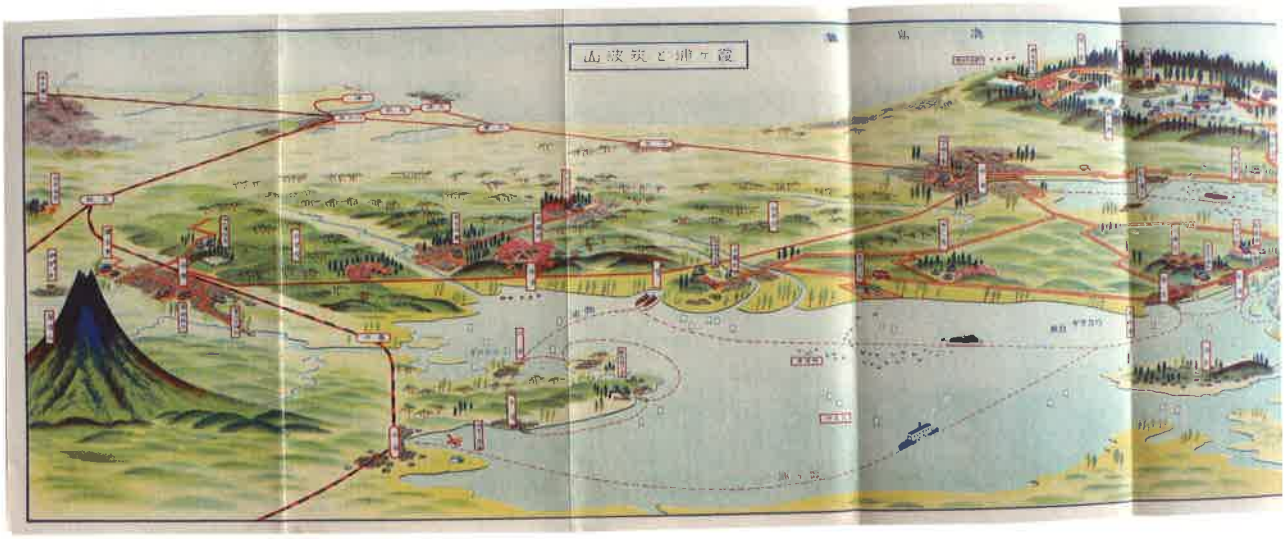
黒田清隆が水原寅蔵に贈った書（個人蔵）
「百事諧」と書かれています。

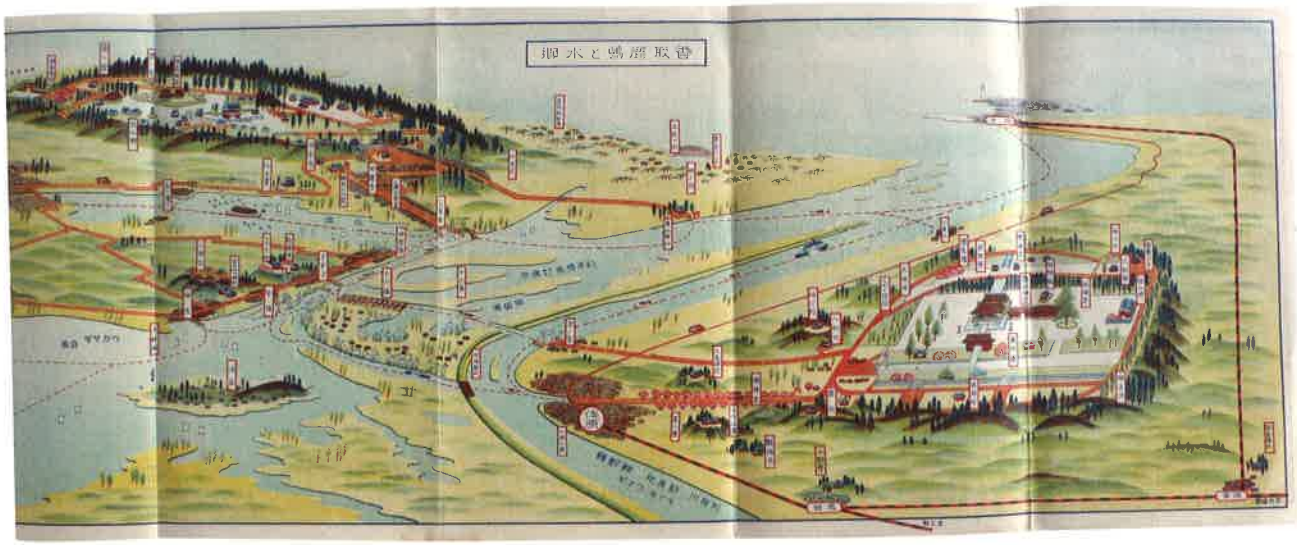
絹本金箔地刺繍釈迦涅槃図（信楽寺所蔵、写真提供茨城県立歴史館）
縦3.6m×横2.1mと大きなもので、今回は写真パネルで展示します。

観光真壁（個人蔵）　昭和29年12月の町村合併で成立した真壁町の範囲が描かれています。また昭和32年12月開業の常陸桃山駅がないので、この間の発行と考えられます。昭和62年3月に廃線となった筑波線が描かれています。

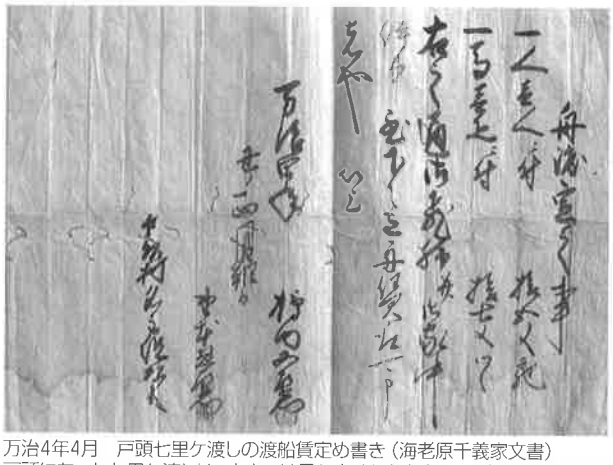
松平上野介飛脚絵符（根本彰氏所蔵）　㊌御用書物入（染野修氏所蔵）

江戸利根両川間運河開鑿全体図（広瀬篤家文書）
自然の地形を巧みに利用して運河を開削したことがわかります。





昭和5年3月　香取・鹿島と水郷、霞ケ浦と筑波山案内図（個人蔵）
霞ケ浦と利根川に蒸気外輪船が描かれています。



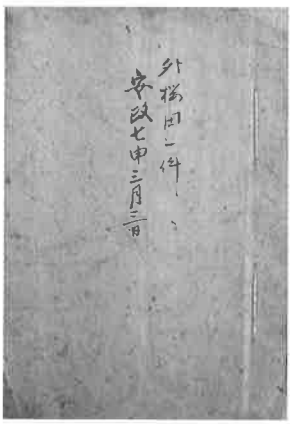
万治4年4月　戸頭七里ケ渡しの渡船賃定め書き（海老原千義家文書）
戸頭にあった七里ケ渡しは、市内では最も古くから存在した利根川の渡船場です。

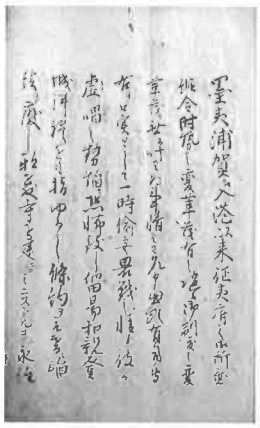
徳川斉昭肖像画（取手市教育委員会所蔵）

藤田東湖肖像画（取手市教育委員会所蔵）

天保14年4月　松平七郎麿通行につき助人馬差出触書（染野修家文書）
松平七郎麿は徳川斉昭の7番目の男子で、後の15代将軍徳川慶喜です。

旧取手宿本陣染野家住宅敷地内に建つ徳川斉昭歌碑
天保11年に江戸から水戸に向かう斉昭が利根川を渡る船中で詠んだ和歌を、
天保15年に歌碑に刻み染野家に贈ったものです。





万延元年3月　外桜田一件（根本彰家文書）
桜田門外で大老井伊直弼を襲撃した水戸浪士らが懐に入れていた
文書の写しで、斬奸趣意書とも呼ばれるものです。水戸浪士たちが、
井伊大老を襲撃するにいたった理由が記されています。

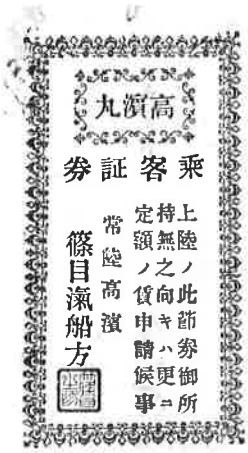
11. 蒸気外輪船の就航と利根運河の開削

明治2年（1869）、新政府は西洋型の帆船や蒸気船の民間所有を許可すると、利根川では川の文明開化とも言える蒸気外輪船の就航が始まります。明治4年2月、東京・中田（現古河市）間に利根川丸が運航したのを皮切りに、蒸気外輪船の就航が相次ぎ、旅客や貨物をめぐって激しい競争が展開されます。

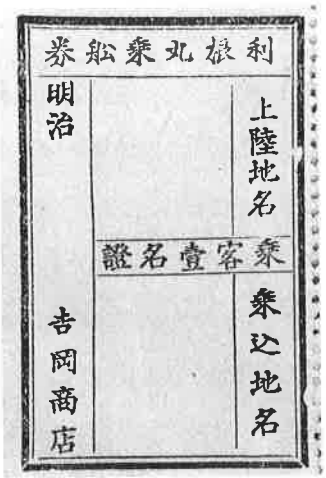
明治10年に内国通運会社が運航を開始した通運丸は、蒸気外輪船の代名詞とまで呼ばれ、87船体が建造されたことが知られています（後にはスクリュー船や石油発動機船も建造されています）。内国通運会社は、明治5年6月に飛脚問屋仲間が設立した運輸会社である陸運元会社を起源とし、明治8年2月に社名を変更しました。通運丸が、江戸川・利根川・鬼怒川・渡良瀬川・霞ケ浦・北浦へと短期間のうちに航路を伸ばして行くにつれ、蒸気船交通の競争は一層激化します。木下河岸（現千葉県印西市）の吉岡七郎は、明治12年8月に第一銚港丸を木下・銚子間に就航、翌13年9月には第二銚港丸、翌々14年5月には第三銚港丸を就

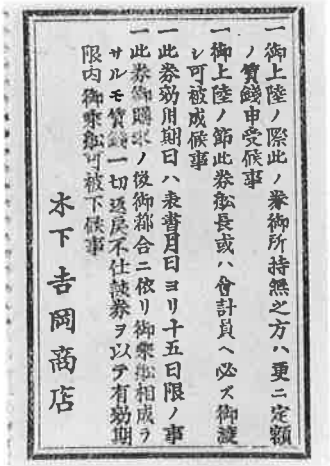
航し、利根川筋で最大の個人汽船業者となりました。一方では内国通運会社・銚子汽船会社と同盟を結び、個人汽船業者淘汰の波を乗り切り、成長していきます。

さて当時の利根川水運は、関宿までさかのぼり、ここから江戸川に入り東京に達していました。そこで利根川と江戸川を短絡する利根運河を開削したのが、下高井出身の広瀬誠一郎です。広瀬は、明治20年に元茨城県令の人見寧らとともに利根運河会社を設立し、お雇い外国人ムルデル（オランダ人）の指導・監督の下、運河開削の事業に取り組みました。工事は明治21年5月に始まり、23年5月に全工事が終了し、6月に竣工式が挙行されましたが、広瀬は直前の3月18日に病没しました。利根運河開通により水運は一層発展し、明治26年4月からは通運丸が利根運河を通航し、28年2月からは通運丸、銚港丸、銚子汽船会社の銚子丸による東京・銚子間の利根運河経由の直行便が運航されます。鉄道の発達とともに水運は次第に衰退しますが、東京・銚子間航路は昭和初年までは存続しました。



（明治）10年　高浜丸乗船券（染野修家文書）

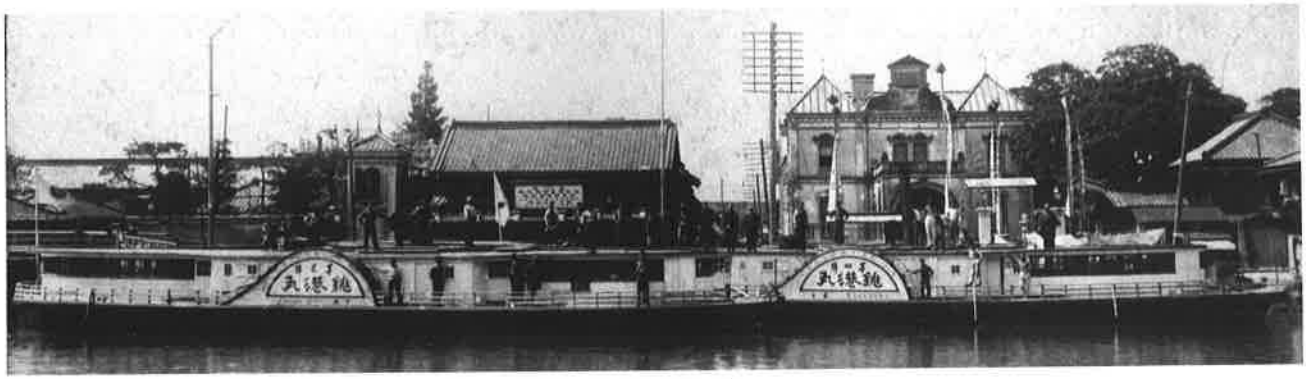




利根丸乗船券（取手市教育委員会所蔵）

工事中の利根運河（所蔵、写真提供　流山市立博物館）

利根運河を航行する蒸気外輪船銚子丸
（所蔵　山中金三氏、写真提供　流山市立博物館）



隅田川の第四銚港丸（右）と第五銚港丸（所蔵　吉岡重弘氏、写真提供　印西市史編さん室）
銚港丸は木下の吉岡家が所有・運航した蒸気外輪船で、明治12年8月から明治35年4月まで利根川・霞ケ浦航路を運航し、明治28年2月からは利根運河経由で東京・銚子間を結びました。第四銚港丸は明治30年6月、第五銚港丸は明治34年4月に製造されました。

Ⅲ. 鉄道網の発達と鉄道旅行

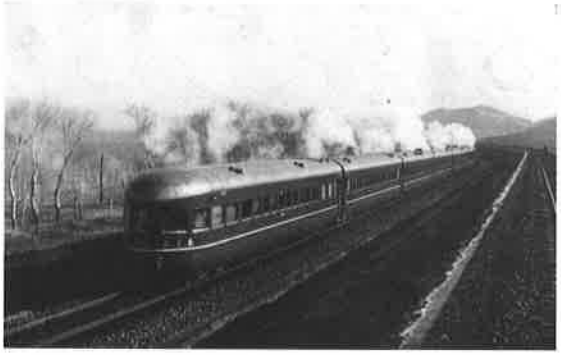
日本最初の鉄道は、明治5年（1872）開業の新橋・桜木町間です。取手では、明治29年12月に日本鉄道の上野・土浦間が開業して（現JR常磐線）、取手・藤代の両駅が設けられました。大正2年（1913）11月には、取手・下館間を結ぶ常総鉄道（現関東鉄道常総線）が開業し、寺原・稲戸井駅が設けられました。

鉄道網の広まりに伴い、人びとは移動手段として鉄道を利用するようになり、鉄道旅行が社会に浸透して行きます。鉄道会社も、旅行客を積極的に誘致したり、沿線に観光施設を建設したりして旅客の増加を図ります。こうして大正の中頃から昭和30年代頃まで、各鉄道会社では沿線の観光地や名所旧跡・神社仏閣などを紹介するパノラマ鳥瞰図（ちょうかんず）を作成しました。この作者として有名なのが、大正広重を自称した吉田初三郎です。今回の展示では、吉田初三郎の作品は2点ですが（写真は裏表紙）、北は北海道から南は九州まで、海外では中国大陸のパノラマ鳥瞰図を紹介します。

さて取手が市となった昭和45年（1970）には、「人類の進歩と調和」をテーマに、大阪府吹田市の千里丘陵を会場に日本万国博覧会が開催されました。アジアで開催される初の国際博覧会となり、総入場者6241万人は平成22年（2010）開催の上海万博の7308万人に至るまで、長く万博史上最多の入場者数を誇りました。戦後の混乱から立ち直った日本の高度経済成長が、まさに頂点を極めた時でもありました。昭和39年10月に東京・新大阪間が開業していた東海道新幹線は、外国からの旅行客からは走るパビリオンと称賛され、躍進する日本の象徴と受け止められました。

次いで昭和60年には、現つくば市を会場に国際科学技術博覧会が開催されました。当時の国鉄は、常磐線の牛久・荒川沖間に万博中央駅を設置し（現ひたちのうしく駅）、ここから会場までシャトルバスが運行されました。またエキスポライナーと呼ばれた臨時列車が増発され、以後常磐線の輸送力は抜本的に改善され面目を一新しました。関東鉄道では、常総線の水海道駅がシャトルバスとの連絡駅となり、観客輸送に努めました。

常磐線方面避暑案内（個人蔵）
東部鉄道管理局が発行しています。
東部鉄道管理局は、明治41年12月から大正9年5月まであったので、この間の発行です。
常磐線沿線を、都会の喧騒を離れた避暑地として宣伝しています。



南満州鉄道の特急あじあ号（足立清氏所蔵）　特急あじあ号は、日本により運営されていた南満州鉄道で、昭和9年から18年まで大連・ハルビン間（当初は満州国の首都新京まで）を走った列車です。最後尾は1等展望車です。

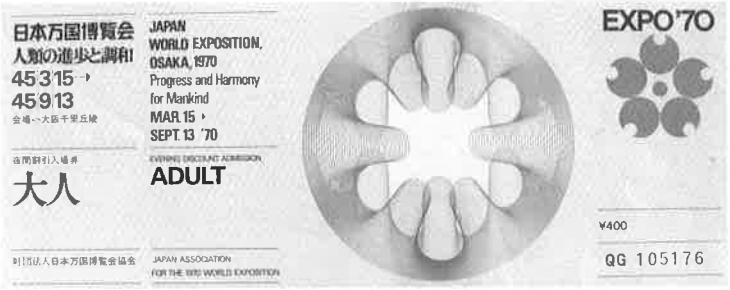
昭和24年1月　水鉄の沿線（個人蔵）
東京鉄道局水戸管理部の井戸川正則氏の編集になります。戦後の混乱も収まらない時期ですが、旅行を楽しむゆとりが戻りつつあったことが分かります。

昭和34年　新緑の常磐（個人蔵）　水戸鉄道管理局が発行した観光パンフレットです。常磐線では、前年から特急はつかり号や準急ときわ号が走り始めており、東京方面からの観光客の誘致に力を注いだことがうかがえます。

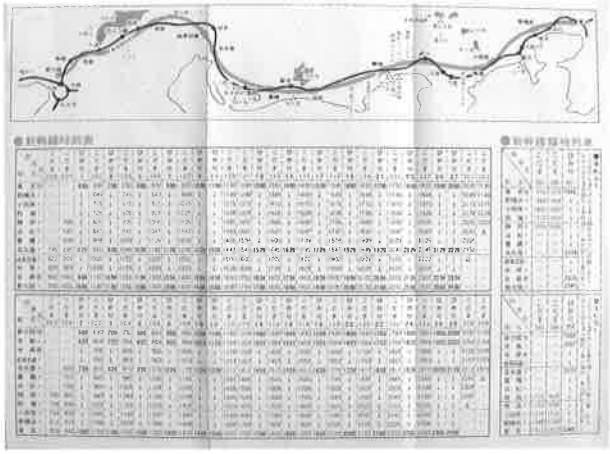
昭和33年5月　東京から関西へ（個人蔵）
東京都中学校社会科教育研究会と、社団法人日本移動教室研究会の編集になる、関西方面に修学旅行に行く中学生のためのパンフレットです。

昭和39年2月　空気のうまい常磐線（個人蔵）
水戸鉄道管理局と水鉄観光連盟の発行になります。高度経済成長下、過密化した大都市からのしばしの逃避を促すキャッチフレーズと言えます。

昭和45年　万国博記念回遊券（個人蔵）



昭和45年　日本万国博覧会入場券（個人蔵）



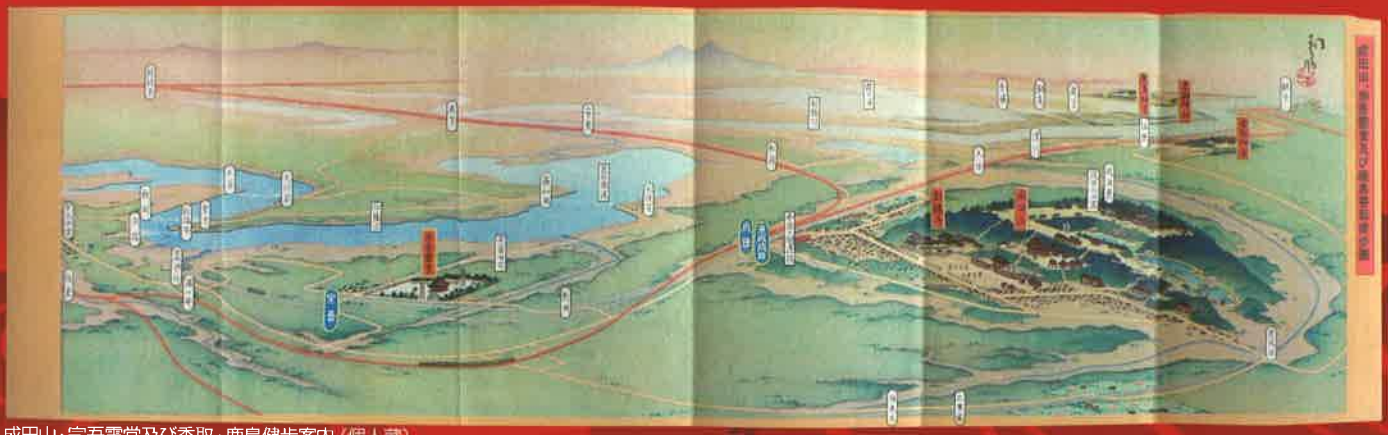
昭和40年4月　東海道新幹線時刻表（個人蔵）
ひかり号は東京・新大阪間を4時間かけて走り、運転本数は上下28本、こだま号は区間運転を含めても上下32本で、現在の所要時間と運行本数と比べると隔世の感があります。新幹線の登場は、鉄道の斜陽化のイメージを改めさせ、高速鉄道時代の幕開けを告げるものでした。

新幹線修学旅行乗車記念のトレー（個人蔵）
DISCOVER　JAPANの文字が書かれていることから、昭和45年以降のものです。修学旅行にも新幹線が利用されるようになりました。ディスカバー・ジャパンは、当時の国鉄が大阪万博終了後の個人旅行客の増大を目指して展開した一大キャンペーンでした。

主な参考文献

『取手市史』通史編Ⅱ・Ⅲ、近世史料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、近現代史料編Ⅰ・Ⅱ、社寺編、石造遺物編、民俗編Ⅱ・Ⅲ、『取手市文化財調査報告書　取手の朱印状』、『茨城県指定有形文化財・取手市指定史跡　旧取手宿本陣染野家住宅修理工事報告書』
『我孫子市史』民俗・文化財篇、『柏市史』近代編、『流山市史』近現代資料編　新川村関係文書、別巻・利根運河資料集
茨城県立歴史館『特別展　祈りの歴史と民俗　絵馬』、同『開館三十周年記念特別展Ⅰ　茨城の仏教遺宝　－みほとけの情景とまなざし－』、国立歴史民俗博物館『企画展示　江戸の旅から鉄道旅行へ』、川蒸気合同展実行委員会『図説・川の上の近代　－通運丸と関東の川蒸気船交通史－』、千葉県立関宿城博物館『企画展　利根川舟運と利根運河』、野田市立博物館『利根運河三十六景　～運河をめぐる、ひと・もの・こと～』、流山市立博物館『流山市立博物館調査研究報告書27　利根運河120年の記録　～魅力ある土木遺産～』、松戸市立博物館『特別展　川の道　江戸川』、横浜都市発展記念館『図録　昭和はじめの「地図」の旅　横浜発日本ひとめぐり』、川崎市民ミュージアム『「東海道」読本』、同『弘法大師信仰展』、豊川市二川宿本陣資料館『鉄道開通　列車に乗って東へ西へ』、堺市博物館『パノラマ地図セレクション　－吉田初三郎の世界－』、我孫子市史研究センター合同部会『新四国相馬霊場　大師道』、木下まち育て塾『Kiorosi（木下）の蒸気船　銚港丸』
JR東日本水戸支社『線路は未来へつづく　常磐線の100年』、関東鉄道株式会社『関東鉄道株式会社七十年史』
青木栄一・老川慶喜・野田正穂編『民鉄経営の歴史と文化』東日本編、宇田正・浅香勝輔・武知京三編『同』西日本編、宇田正『鉄道日本文化史考』、川名晴雄『利根運河誌』、北野進・是永定美編『利根川　人と技術文化』、北野道彦・相原正義『新版　利根運河　利根・江戸川を結ぶ船の道』、佐賀純一『通運丸と黒田船長　－消えた蒸気船とそのころ－』、白土貞夫・羽成裕子『水郷汽船史』、新保國弘『水の道・サシバの道　－利根運河を考える』、中川浩一『茨城県鉄道発達史』、『観光の文化史』、西村文則『社会事業家　廣瀬誠一郎傳』、野田正穂・原田勝正・青木栄一・老川慶喜編『日本の鉄道　成立と展開』、原田勝正・小池滋・青木栄一・宇田正編『鉄道と文化』、堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む　描かれた近代日本の風景』、益田啓一郎編『美しき九州　「大正広重」吉田初三郎の世界』
『週刊　四国八十八カ所遍路の旅』全30巻

大沼電鉄沿線案内（個人蔵）
大沼電鉄は、昭和4年に開業した函館本線大沼駅（現大沼公園）と鹿部村（現鹿部町）を結ぶ鉄道でした。戦時中の昭和20年に不急不要線の指定を受け廃線となりましたが、戦後の昭和23年に一部路線で復活しました。しかし昭和27年には再度廃止となった薄幸の鉄道でした。



成田山・宗吾霊堂及び香取・鹿島健歩案内（個人蔵）
絵は吉田初三郎の筆になります。

昭和10年2月　長野電鉄沿線案内（個人蔵）
絵は吉田初三郎の筆になります。

昭和11年4月　阪神急行電鉄沿線案内（個人蔵）

埋蔵文化財センター第29回企画展
街道・水運・鉄路の旅
平成23年2月21日～4月22日
編集・発行　取手市埋蔵文化財センター　制作・印刷　（有）石山宣伝研究所